

現代朝鮮語における比況表現について (2)

— tasip' i —

深 見 兼 孝

はじめに

tasip' i は主として動詞の語幹に付くが¹、大まかに言って二つの用法を持つ²ようである。次の例を見られたい。

1 po tasip' i wančŏnhata.³
みる かんぜんだ

2 apŏc'inŭn kŭ hŏmhan sankilŭl hwihwi nal tasip' i
ちちは その けむしい やまみちを びやんびやん とぶ
kŏlŏssta. (全商國「脈」)
あるいた

この二例のうち、比況表現の文と言えるのは2である。2では、apŏci '父' のkŏl- '歩く' さまがnal- '飛ぶ' さまに喩えられているのである。一方、1は「見てのとおり完全だ。」といった意味で、何かがwančŏnha- '完全' なさまがpo- '見る' さまに喩えられているのではないので、この文を比況表現の文と言うことはできない。本小稿では、2のような比況表現の文に用いられるtasi p' iに限って、それが用いられる条件について考えてみることにする⁴。

1 主語との関係

tasip' i は節も句も導くことができるが、節の場合はその節の主語、句の場合は(多くの場合、文全体の主語と同じであるが)その句内の動詞の意味上の主語に、無生物を表わす名詞が来ることはないようである。次の例を見られたい。

3 *yŏnkika ki tasip' i mit' patakŭl hŭlŭko issta.
けむりが はう そこを ながれて いる

4 ?palo kwisčŏnŭlo hŭlŭ tasip' i yolanhatŏn tolangmul
ちやうど みももとへ ながれる おおきかつた みで
solika mŏlŏčyŏ kassta.
おとが とおくなつて いった

5 kulöngika nal tasip'i kiö oko issössta.
 へびが とよ はって きて いた

上の例はいずれもtasip'iが句を導いている例であるが、その句内の動詞の意味上の主語は、3がyönki 'けむり'、4がtolangmul soli '溝の音'、5がkulöngi 'へび'である。これらのうち、有性物を表わすのは5のkulöngi 'へび'で、この5が受け入れ可能な文なのである。

3のtasip'iが導く句内の動詞ki- 'はう'は、本来動作動詞であろうと思われるが、無生物を表わす名詞yönki 'けむり'が主語である、この3が三例中もっとも受け入れがたい。tasip'iは(抽象物を含め)物を人に喩える擬人法には用いられないのであろう。

ところで、tasip'iの導く節の主語、または句の意味上の主語が無生物を表わさないということは、必ずしもその節、または句の動詞が動作動詞でなくてはならないということの意味しない。次の例を見られたい。

6 künün čule mukkyösö kküllyö ka tasip'i ötum soke
 かれは ひもに しばられて ひかれて いく やあ なかに
 salačyö pölyössta.
 きて しまった

7 nanün hömölöči tasip'i kü čalie čučöančassta.
 わたしは くすれる その ばへ すわりこんだ

6、7とも受け入れ可能な文であるが、前者のküllyö ka- '引かれて行く'、後者のhömölöči- 'くずれる'は動作動詞とは言えない。なぜなら、これらはそれぞれの主語kü '彼'、na '私'の意志によって起こる事柄を表わしてはいないからである。

2 tasip'iが結合した動詞の表わす事柄と、文末の動詞が表わす事柄の時間的關係

現代朝鮮語では、文末の動詞が文(単文の場合)または主節(複文の場合)の述部の主要構成要素のひとつである。tasip'iが結合した動詞の表わす事柄と、文末の動詞が表わす事柄は、時間的に同時と考えられる。つまり、tasip'iを含む文の表現意図は、文末の動詞が表わす事柄を、それと同時に発現していると仮定される事柄に喩える、というものである。次の例文を見られたい。

8 * kü yöčaka čökolilöl pösö hüntülimyö mič'i tasip'i
 その おんなが チョゴリを ぬいで ふりながら くるう
 akül ssössta.
 あらんかざりのこえできけんだ

- 9 * kūnyōnūn čūk tasip'i čamtülō issta.
 かのじよは しゅ たしつゝ なむつて いる

上の二例はいずれも受け入れがたい文であるが、tasip 'i が結合している mic 'i- '狂う' (8)、
cuk- '死ぬ' (9) は、次の例文が示すように、単純現在形では発話時点でその表わす事柄が発現
していることを表わしえない。

- 10 * (今、死んでいる人について) kũ salamün čuknūnta.
 あの ひとは

- 11 * (今、発狂している人について) kũ nomi mič'inta.
 あいつ

10、11は発話時点で「死んでいる」こと、「狂っている」ことは表わさないが、発話時点より後に「死ぬ」こと、「狂う」ことは表わし得る。これと同じように、例文8、9において、miɕ'i- '狂う'、ɕuk- '死ぬ' はそれぞれakül ssössta 'あらんかぎりの声で叫んだ'、ɕamtülö issta '眠っている' と同時の事柄を表わすのではなく、それより後の事柄を表わすと考えられる⁵。

さらに次の例を見られたい。

- 12 * nūktāka čapamōk tasip'i tōmpyōtūlōssta.
やまいぬが とってくう とびあつた

- 13 * nanŭn kohamilato čilŭ tasip'i čönsine himŭl čuössta.
わたしは どかりでもする ゼんしんに ちからを いかけ

この二例も受け入れられない。12の *tšəpyəštülössta* ‘飛びかった’、13の *himül čuössta* ‘力を入れた’は、それぞれ時間的に *čəpamək-* ‘取って食う’、*koham čilür-* ‘どなる’よりも先に起こるべきものである。言い換えれば、「飛びかった」は「取って食う」より、「力を入れた」は「どなる」より先、または同時ではあり得ないのである。

一方、次の例文は全て受け入れられる。これらの文では、tasip 'i が結合している動詞の表わす事柄と、文全体の動詞が表わす事柄は同時と考えられる。

- 14 hakyōk palp'yolūl poko čumču tasip'i kippohako issta.
 こうかく はっぴようを みて おどる よろこんで いる

- 15 sanainün näpät' tasip'i malhässta.
おとこは はをすてる いった

16 Ukün kulö tasip'i tomangč'yössta.
 ウクは ころがる にげた

17 künün yongsölato pil tasip'i mäköpsnün moksolilo ipül
 かれは ゆるしても こう ちからのない こんで くちを
 yölössta.
 ひらいた

3 tasip'iが結合する動詞のアスペクト的性格

次の例文を見られたい。

18 * künün öncena čamtülö iss tasip'i kwamukhata.
 かれは いつも めむって いる ものしすかだ

19 * kün'yöüi čamtün ölkulün mač'i čukö iss tasip'i
 かおじよの めむった かおは あたかも しんで いる
 poyössta.
 あえた

20 * sanaiüi sonül ppulič'iko mič'yö iss tasip'i tallyö
 おとこの てを ぶりきって くるって いる はしって
 kassta.
 いった

上の3例において、tasip'iが結合している動詞はいずれも-ö iss-によって状態相を表わしている⁶が、受け入れられない。おそらく、tasip'iは状態相を表わす動詞とは結合しないのであろう。先に挙げた受け入れ可能な例文2、5～7、14～17において、tasip'iが結合している動詞は状態を表わしてはいない。

おわりに

以上tasip'iを含む文が成立する条件を考察してきたが、それらが相互にどのような関係にあるのかという核心的問題には今回触れることができなかった。また、これらの条件だけでは処理しきれない事象が存在することも率直に認めておこう。前回と今回の調査から、現代朝鮮語の比況表現文は、それを明示する要素の違いによって微妙なニュアンスの差を生み出しているものと推察されるが、その詳細の解明と併せ、今後の研究に期したい。

注1 「國語大辞典」(李熙昇, 民衆書林1981)によると、tasip'iはiss- 'ある、いる'、kyesi- (iss-の尊敬語)、ops- 'ない、いない'、ani- (否定詞)にも結合する。

2 注5参照。

3 注1に掲げた辞典に挙げられている例文である。

4 インフォーマントに広島大学教育学部に留学中の朴和煜君になっていただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

5 次の例文ではtasip'iがɕuk- '死ぬ'に結合しているが、この文は比況表現の文ではなく、むしろ程度表現の文と解すべきであろう。

a) nanŭn ɕuk tasip'i nollassta.
わたしは しぬ おどろいた

ɕuk-と同様、kiɕɔlha- '気絶する'も単純現在形では発話時点で「気絶している」ことを表わしえない。次の例文が成立するのは、発話以後にkü '彼'が「気絶する」と想定されている時である。

b) kŭnŭn kiɕɔlhanta.
かれは きぜつするぞ

a)でɕuk-とkiɕɔlha-を入れ替えても文は成立するが、そうしてできた文はやはり程度表現文と解すほうが自然のように思える。

6 例文20のmiɕ'yɔ iss-はmiɕ'i+ɔ iss-と分析される。i+ɔ>yɔは用言語幹と語尾にまたがる極めて規則的な縮約現象である。